

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	短歌：文苑
Author(s)	人の子；千條；露草
Citation	龍南會雜誌， 1 2 9： 5 1 - 5 3
Issue date	1909-02-28
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/6206
Right	

青き花あこかれゆけど思ひ寝の

夢だに許らぬ筑紫路の三年の旅に

新しく戀ふ人も無き灯火の

影に瘦せたる頬を母に見せにゆかばや。

故里の尾張は枯れし草の原

海見ぬ國の淋しさに我まつ人に。

(四十一年十二月二十四日)

短 歌

泥

人 の 子

泥濑^じひこころの瓶^{びん}の上澄^{うわす}みを人むごきかあませてよろこぶ。

愁傷^{しゆうかう}よ喜悅^{きえつ}の極^{きよく}と何わかつたが全身の脈亂^{みくらん}しあり。

ゆへもなく去^さられにし女の胸^{むね}に湧^わく想出^{きうしゅつ}のごと雲飛^{うんぴ}ぶゆふべ。

月の門君^{かどきみ}は鼓^{つづみ}くに我^{われ}れ推^{おし}すに慣^なれ來^きしかはす相並^{あひなら}ぶ家。

をみちらの胸^{むね}を彩^{いろど}る初色^{はついろ}と血^ちの氣^きにもゆる春^{はる}のあかつき。

いくさある星^{ほし}の世界^{せかい}の野^のをすぎて木枯^{きこ}いまのわがむくろ吹^ふく。

「陰謀^{いたくま}せる衆^{しゆ}の刃^{やいば}に強^{つよ}いて我^{われ}れ色たゞしあり」この夢^{ゆめ}を見る。

秋^{あき}の雲故^{ふる}郷山^{きやうさん}のたまたまひとつと暮^{くれ}れつくと照^てりつほろびぬ。

秋^{あき}の雨^{あめ}黒^{くろ}う朽^くちぬる大木^{おほき}の檜原^{ひのくさ}をうちぬこの期^き終^はるや。

愛さ云々道草くらうて木くれたる駒はそのまゝくれてを行く。
吃、煙草すねてむづがる君が型まねびあさする春の日曜。
虚心にもかゝることばをのたまひて我が困んずるを笑み給ふかあ。
大河流「時」の流れと相あうて極なき流れ流れゆく身や。
胸の瑟淨きに過ぎて白き手のふれず音もなく秋を朽ちゆく。

海

千

條

杯のこまかき波をめでしれてうたげのにはの群集にゐぬ。
御心をやうやうにしてよとかへさしてもつくる戀のつめたき。
君見るにはた海見るに春見るに標準点のかろく動ける。
君と云ふ重き荷物を失ひてかろらになりぬされどさびしき。
わが轍いかれるときに君をしく野の花をしく足なへをしく。
衝動にくせつきし今でもすれば火にも入らむずあさましきかを。
簿記の線、なめげの文字、するよごむ滴の運定にインキ壺見る。
師と親と人ひとりとははこらまく帽に三條の拍き線まく。
阿蘇の煙二條のぼるかたかたのにおさに君を占ひしかた。

はたる草さては黄くも葉はわのなきものを撰びてこのみ給へり
よその子と君と手とりて歩めどもねたまぬほそのれぞとなりぬる
「千鳥丸」怒濤「帆柱」名をば海「戀のこののみたにす思へる
(學兄平澤に)

露

草

白狀す遇々君を思ふ日は酒沽ふ錢を持たぬ時あり。
其昔わすれし顔を見むためにふと思ひ出て四つ辻に立つ。
一片の麵麴をのこしぬ今日の日の明けたる故に明日うたがはず。
時ありて我死に君も亦死をむ其後の世はたもふすべし。
反逆のともがら戴せし飛行器は稍君はあれ歡聲をあぐ。
君が辞書その一字無しあまたふびくれども遂にたゞ一字なし。
我水に字を書くかなた小女等は糸をき機をはた々と織る。
くら々と眼くらみぬ黒髪のかげの外なる世界のぞみて。
われ寝ねて天をうかゝひ月と日と駢びてたゞぬ戀をあはれむ。
蒼穹にたゞ一點の輕氣球射むとひしめき人數多ゆく。
戀うらん價は知らすわれ見るとたかし夢見る小女にうらん。
もの足らぬ人にもあるかさびしげに薄荷煙管パイプを吸ひて居給ふ。